

入選 長野県 氏名非公開 (60代)

年金と直接の関わりを持ったのは、今から15年ほど前、私が40歳代半ばのことでした。父親の妹である叔母が65歳の誕生日を迎える何か月か前に、年金の申請書類が届いたからです。叔母は若いころから施設に入所しており、申請書類はその施設から転送されてきたものでした。すでに障害年金を受給しており、書類に記載された受給額はそれを下回るものでしたので、「年金が減らされてしまう」「入所費用が賄えなくなってしまう」と父親とともに先行きに大きな不安を抱いたことを覚えています。

叔母は統合失調症でした。戦前戦中の産めよ増やせよの時代、10人の子をもうけた祖父母の9人目の子供でした。叔母は20歳になる直前に、父親にとって初の男子である私が産まれた後、生家を遠く離れることになり、施設での暮らしが始まりました。

叔母の存在が日常的に話題になることはほとんどありませんでした。祖母も父も年少の私に詳しく語ることはなく、大人の問題として子供には知らせないでおこうと考えていたのだと思います。それでも会話の端々から、何となく知っていくことになります。私の生家は農家で、その跡取り息子に何かあってはいけない、祖母のそんな判断から、施設暮らしになったと随分後になってから知りました。

私の年金に関する知識はほとんどなく、すでに受給している障害年金との関係はどうなるのか不安を持ちながら、手続きを早くしなさいと何ページにもなる書類が無言の圧力を加えてくるように感じました。そこで頼ったのが年金相談窓口でした。

幸い、当時の住まいの近くに相談窓口があり、予約もなく訪ねたところ、不安はまったくなくなりました。「2つの年金の両方を受給できないので、どちらかを選ぶこととなります。その場合は金額が多い方になります」との説明でした。この説明を聞いて、雲が晴れて青空が広がるように視界が開けた気がしました。振り返ってみると今では当たり前にも感ずるのですが、当時の知識では想像もつかない回答でした。この説明を聞いてからは、申請書類からのプレッシャーも感じなくなり、必要事項を記入して手続きを終えることができました。その後も障害年金により叔母の入所費用や医療費を、自立的に支払うことができました。

その後、いわゆる「消えた年金記録問題」が明らかになり、年金制度に対する不信感から年金保険料を支払わない人が増えているとのニュースや記事に接するようになりました。私は叔母の年金に関する経験から、「行政サービスのうち年金は最も役に立つものの一つであることは間違いない。最もありがたい行政サービスの一つ」と考えておりました。また国庫負担金が拠出されていることから、加入しないのはわざわざ損をすることですよ、と言ってあげたいくらいでした。

叔母は7年前に亡くなり、荼毘に付して50数年ぶりに生家に戻り、遺骨は父母や戦死した兄、私の父など叔母の兄弟4人とともに生家の墓に眠っています。私は喪主として葬儀を営み、納骨そして一年忌も執り行いました。施設入所中には、入所費用や医療費の支払いが滞らないよう口座管理を行ったり、おやつの差し入れや介護用品の補充などを行ったりしました。

叔母に関することは、初めは母親である私の祖母が、祖母が亡くなってからは兄である私の父が、そして年金の書類が届いたのをきっかけに甥になる私が引き継いで担ってきました。今振り返ると、私はこの役割を自然に受け入れていたように思います。それは、祖母にかわいがられていたこと、「跡取り息子」という伝統的価値観を叩き込まれていたこと、私が産まれたのをきっかけに叔母が生家を離れたことの他に、年金により叔母が財政的に自立できていたことが大きかったと思うのです。

私の一人息子が20歳になって国民年金の案内が来た時には、年金のありがたさをよく言って聞かせました。息子はまだ学生のため、保険料を私が支払っています。私も60歳を過ぎて年金を受給する年齢が近づいてきました。もうすぐ自分自身で年金の価値を実感することになります。

その日が来たら、私は胸の内で叫ぶでしょう。ようこそ年金さん、よく来てくれたね。これからよろしく頼みます。